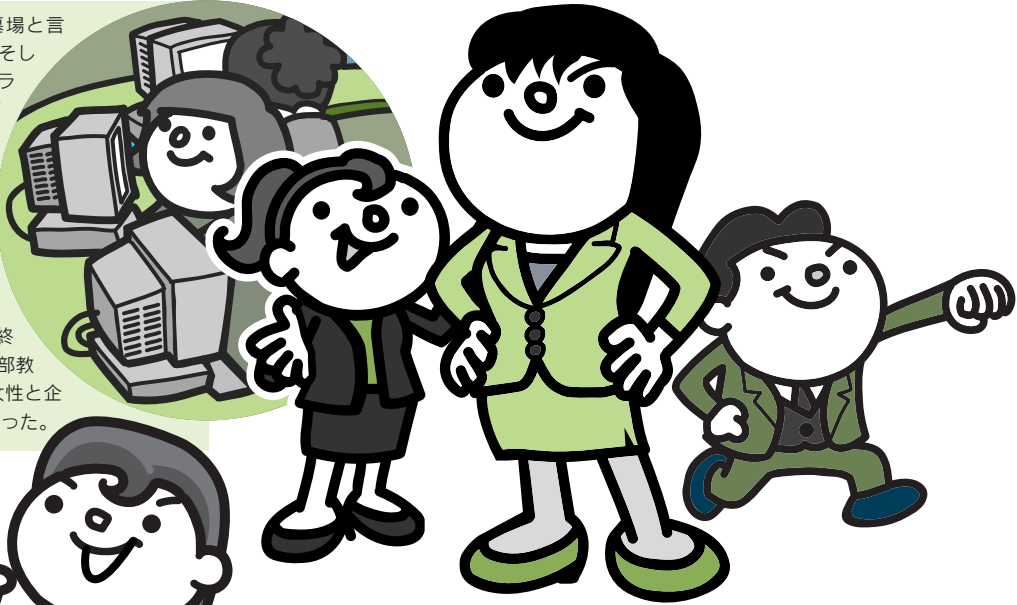


「人気ドラマの中の日本型企业社会」 ～経済学部3教員がシヨムニを語る～

「シヨムニ」とは舞台となる会社内でOLの墓場と言われている庶務二課の6人が強くそして実にカッコよく生きていくドラマ。2年前にテレビでパート1が放送されて以降、映画化され、スペシャル版も放映され、そして今年4月からはパート2が放映された。これだけ多くの支持を集めていたからには、そこに今の時代の気分が少なからず反映されているはずだ。そこで、この「シヨムニ」(パート1の最終回)を題材にして、3人の経済学部教員に、今の日本的な企業社会、女性と企業との関係等を自由に語ってもらった。



花見や運動会のない会社は魅力ない？



シヨムニの主要な業務の一つは、社内旅行や運動会といった社内の年中行事の運営。こうした社内行事はかつて日本の会社の特徴の一つだったわけだが、ドラマの中で彼女達は、この伝統を意外にも肯定的に捉えている。主人公(江角マキ子)は、「花見も運動会もない会社なんてまっぴらだね!」と、決め台詞を言い放つのである。

伊藤/まずは素朴な疑問からいきたいと思いますが…。年中行事というのは日本企業の家族的経営手法の象徴なのでしょうけれども、それをどうして彼女達が守ろうとしているのか違和感を感じましたね。戦争で崩壊したイエ制度は、戦後、企業に引き継がれていったという考え方があるようですが、女性社員は企業の中でも、仕事と家庭の区別がつかないまま、妻役割や嫁役割を背負わされてきました。多くの女性にとって、それはたまらなかつたことなのでしょう。このドラマで主人公にとっても、ドラマ展開のなかでも社内行事が重要視されるのは、原作者が男性だからなのか、あるいはそれを越えた意図があるのかどうか…。

石嶋/企業の家族的一体感もそうですけど、社会的にもドンドン個人の原子化が進んでしまって、『孤独な群衆』がリアルなものになってきているのに対する反動かも知れませんね。なんとなくある孤独感・孤立感から、どっかで「繋がり」を求めているんじゃないですかね。公私混同のズルズルした一体感じゃなくて。

佐藤/現在でも社員旅行とか、運動会とかといった年中行事は行われているんですかね。

石嶋/社員旅行とかは、規模を小さくしてもやっているようですね。ただ、強制参加ではなくなっているようです。

佐藤/かつては企業の年中行事は一体感を高めるためにやっていたということですかね。娯楽の少なかった時代に企業がレジャーの代わりとして面倒をみるという。

石嶋/それとあわせて、保養所を作ってみたりね。経営者の立場からすると、それは福利厚生なんだと言うことのようにです。学生の頃、労務管理論で聞いた記憶があるんですけど、どちらかと言えば、従業員への施しみみたいな印象を受けましたね。

司会/今回は逆に女性達が年中行事を積極的に利用し尽くすということなのでしょうかね。行事で使われるのではなくて、利用してしまおうということで肯定的に描いたのかも知れませんね。会社は利用するものという考えは、現在放送されているパート2なんかでも、主人公の決め台詞によく出てくるようですね。



佐藤 淳 助教授 (教職科目担当)

キャリア志向の理想と現実

1986年に男女雇用機会均等法が施行されると、仕事のできる女性がマスコミの中でもよく描かれ、当時の女子学生の就職でも、それがあつた種の理想像として頭の中に描かれていた。しかし施行後十数年を経て、雇用環境も厳しくなる中で、女性の企業との向き合い方も変化せざるを得ないようだ。

伊藤／このドラマでは総合職の女性があまり出てこないようですね。

司会／パート2では、商品開発を担当する典型的なキャリア志向の女性が出てくる回もあるようですけれど。それからショムニの一人は成績優秀でキャリアコースを歩むはずが、自信過剰が災いしてショムニに異動させられてしまうという設定になっていますね。

伊藤／雇用機会均等法が施行されて、女性の権利や機会が拡大したという現実がある一面、女性職員のなかにも「エリートとマス」の二極分解が起きているといわれています。この分解は男性にもあるのですが、男性と女性では境界のレートが違って、女性は並外れた能力があつて、並外れた努力をするごく一部の人がエリートになっていく。主人公も大卒という設定のようですが、マスの中にいる。そうしたマスの中にとりのこされている一群の復讐劇を、同じマスの中にいる女性たちが見てうつぶんをはらそうとしているようなところが、ドラマの人気のかなと思ひました。

司会／均等法は施行されたけれども、それが現実には家庭との両立とかで、男と同じようにやってもなかなかうまくいかないことがありますよね。それなら、自分達で主張して、私達には私達のポリシーがあるのよっていうね。理想を描いたところで現実とは異なるわけだし、だけれどもその現実をポジティブに見ていこうという意図もあるのかもしれないですね。

伊藤／均等法で同じスタートラインに立っていいとは言われたんだけど、並んでみたら女性は荷物を背負って走らなければならない。そんな馬鹿馬鹿しい競争には自分からおりて、別の方法でやるわっていうことでしょうかね。しかし、それでも決して勝っているわけではないし、何かもう一つ悲しいですね。

石嶋／ショムニの女性たちは、有名占い師とか財テクで儲けてたりとかアラビア語を話せるとか、一人除いてそれぞれその分野で生きていけるようなんですね。だから会社が潰れようが、解雇だといわれようが全然平気。代替的収入の機会があるんですよ。企業に閉じこめられてしまえば好きなことも言えないでしょう。人事部長の役なんかその典型でしょ。会社は賃金を得る手段で、他にも自分の生きる手段があるんじゃないか。最近資格を目指す人が増えてきているようですが、会社の中で意味を持つような資格だけでなく、自分の得意分野で生きることができる、会社に入るだけが人生じゃないんだよって。



石嶋芳臣 助教授（企業形態論担当）

司会／女性の場合、一部の総合職で上を目指すという人は別として、やっぱり距離の置き方は男性とは違うのでしょうか。ただ代わりのものはあるかというところでは多いのでしょうか。

伊藤／玉の奥願望みたいなことを言う割には、結婚に対する期待が全くない。このドラマが女性に支持されている限り、日本の少子化はいよいよ進むような気がします。

佐藤／ところで、今営業の補助とかお茶汲みとかをやっている、かつて言われていたような典型的なOLという人は実際にどれほどいるのでしょうかね。今は派遣社員に切り替えているところが多いし、秘書課といつても女性がずっとならんでいるなんてないんじゃないかな。もし、いないとしたら、このドラマは本当に架空の設定で、平社員で一番単調な仕事をしているだけだけれども、大事件とかが起きると活躍するという一種の活劇のような気もしますね。だから今の会社の状況と引き比べ視聴者に受けているというのとは少し違うのではないかなという気もします。ドラマとしても基本構造なんかは釣りバカ日誌と似ているね（笑）。

伊藤／仕事はあるけれども補助的で、代替可能な仕事で、その間にお茶汲みとかもしなければいけないといったような業務をしている人は今でも多いんじゃないかなと思ひますよ。それとは別に、下層にいる冴えない人が変身するスーパーマン的な伝統的スタイルが、現在のドラマの中に残っているというのもおかしかったですね。女仁侠ものみたいな感じもしますね。

司会／このドラマの中で現在のOLの人達の立場を反映しているのは、むしろ秘書課の杉田さん（戸田菜穂）かもしれないですよ。ドラマの中では主人公の敵役みたいなんだけど、ホームページの掲示板なんかを見ていると、結構好感を持たれているみたいなんですよ。もともとドラマの展開もパート1の時とは少し違うようですけど。



伊藤淑子 教授（社会保障論担当）

金の亡者、ナショナリズム、組織と個人

今回見てもらったパート1の最終回では、満帆商事が倒産に追い込まれ、そこへベンチャー企業の社長と称した男（陣内孝則）が買収に乗り込んでくる。以前の経営の仕方とは全く異質なものを持ち込んでくる彼に対して、これまで対立していた社員が一つにまとまり、ショムニもそれに乗ってしまう…。

石嶋／陣内孝則が演じていたのは、いわゆる乗っ取り屋ということになるのでしょうかね。彼は金の亡者のように描かれて、すっごく醜悪なイメージなんだけど、日本人の抱いているイメージってあんなものなのかな。でも主人公に「あんたはカネにこきつかわれているだけじゃないの」と一喝されてたじろぐところなんか、ウェーバーの言う徹底的に合理化された「精神のない専門人、心情のない享楽人」を象徴しているようにも見えて面白かったですね。ある意味それは、西欧の合理的経営に対するイメージかも知れませんね。

司会／彼も非現実的なわけの分からない役柄ではあったけれども、彼に対するあの会社の動きは、どこかナショナルイズム的なものも感じてしまうのですが。

石嶋／ドラマでも乗っ取り屋を追い出す号令に、「満帆の社員なら立ち上がれ」ってショムニの一人がアナウンスする場面がありましたよね。あそこで感動したり、盛り上がってしまうところなんか、イデオロギー的な訴えかけに対する弱さというか、無批判なところってあるかも知れませんね。

佐藤／何かを掲げてしまえば、すなわち日の丸を掲げてしまえば、君が代を歌わせてしまえば、忠義心とか、みんなでまともろうという気持ちとかが自動的に生まれてくるというふうに思っている人がまだいるということだね。

司会／その一方で、日本的経営を守るべきだという考え方は経営の研究者の中にもありますよね。やっぱり集会的な行為を捨てて、ばらばらになってしまえばますます弱くなってしまいかもしれない。そういう揺れがあるように思うのですが。ただドラマの中でも、最終的にショムニの活躍で会社は乗っ取りから救われるわけけれども、最後で主人公が「だって会社潰れたらクイズ大会に出れないじゃん」というところね(笑)。これに似たオチは他の回でもみられて、このドラマの一つのパターンみたいですけど。この組織に対する個人の距離の置き方がドラマで一番言いたいところなのかもしれませんけれどもね。

石嶋／最後のところで、社長が次の代に引き継ぐとか言っていました。創業者がいて創業者の家族が引き継いでいくという、いかにも日本的という感じがしましたね。実際に、日本を代表する大企業でもそうですからね。どうも個人と組織とを切り離せないまま繋がっているんです。それに対して、ショムニの連中は組織の中にはいるけども決して自己を見失わない、互いの人間関係もサバサバしているようで、どっか深いところで認め合っているというか繋がっている。そういう生き方っていうのに憧れみたいなものがあったら、このドラマが受けてるのかも知れませんね。

興味湧いたら読んでみよう

～対談者が推薦する関連図書～

D・リースマン
「孤独な群衆」
みすず書房

M・ウェーバー
「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」
岩波書店

大沢真理
「企業中心社会を超えて ～現代日本をジェンダーで読む～」
時事通信社

日本経済新聞社編
「女たちの静かな革命『個』の時代が始まる」
日本経済新聞社

伊丹敬之著
「人本主義企業」
筑摩書房

「外交講座」開かれる

6月30日(金)の「国際事情」の講義(経済学部対象)時、外務省より講師 中近東アフリカ局長 榎 泰邦氏を派遣いただき、外交講座『日本の対アフリカ外交の柱』を行いました。



講師略歴

昭和42年8月外務公務員採用上級試験合格
43年3月東京大学法学部第二類中退
4月外務省入省
58年8月経済協力局政策課企画官
59年9月経済協力局国際機構課長
60年9月経済協力局有償資金協力課長
63年7月大臣官房
中近東アフリカ局中近東第一課長

平成 2年3月大臣官房
大臣官房外務参事官兼経済局
3年2月在オーストラリア日本国大使館 公使
5年2月在アトロイト日本国総領事館 総領事
7年2月欧州共同体日本政府代表部 公使
8年4月欧州連合日本政府代表部 公使
9年2月大臣官房文化交流部長
12年1月中近東アフリカ局長

北海学園大学大学院経済学研究科・ 経済政策専攻修士・博士(後期)課程

2001年度入試案内

(1) 入学定員：＜修士課程＞15名 ＜博士(後期)課程＞3名
(含む社会人特例受験)

(2) 日程

基本的な選考方法は昨年同様です(詳しくは募集要項参照)。

＜修士課程＞一般(第1期)

2000年 9月26日(火) 入学願書受付開始

10月 2日(月) 入学願書受付終了

17日(火) 入試

24日(火) 結果発表

＜修士課程＞一般(第2期)・社会人特例、＜博士(後期)課程＞

2001年 1月16日(火) ＜修士課程・博士課程とも＞入学願書受付開始

22日(月) ＜修士課程・博士課程とも＞入学願書受付終了

2月20日(火) ＜修士課程＞入試

21日(水) ＜博士(後期)課程＞入試

3月 2日(金) 結果発表

北海学園大学大学院経営学研究科・ 経営学専攻修士課程(MBA)

2001年度入試案内

(1) 入学定員：7名(含む社会人特例受験)

(2) 日程

基本的な選考方法は昨年同様です(詳しくは募集要項参照)。

(第1期) 一般・社会人特例とも	：	(第2期) 一般・社会人特例とも
2000年 9月 5日(火) 入学願書受付開始	：	2001年 1月16日(火) 入学願書受付開始
11日(月) 入学願書受付終了	：	22日(月) 入学願書受付終了
26日(火) 入試	：	2月21日(水) 入試
10月 3日(火) 結果発表	：	3月 2日(金) 結果発表

(3) 第1期学内説明会

●第1回 2000年7月6日(木) 午後4時30分～5時30分

●第2回 7月8日(土) 午後4時30分～5時30分

(どちらに参加してもかまいません)

●● ともに問い合わせは経済学部事務室まで ●●

経済学部公開講座

第3回経済学部市民公開講座が『「こころ」の再発見一人間行動の見方・考え方』(6月10日から7月8日までの毎週土曜日・計5講)をテーマに、引き続き第4回は『地域経済再生の模索—グローバル化を視野にいれて—』(6月14日から7月12日までの毎週水曜日・計5講)をテーマに開講されました。昨年の第1回、第2回を超える受講申込者数となり、社会人や学生を中心とした受講者は熱心に耳を傾けていました。

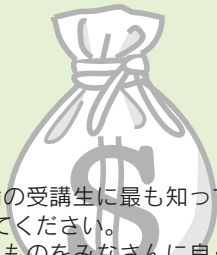
企業行動論

石井 耕

司会：まず、はじめに企業行動論の受講生に最も知っておいてほしい講義の意図などを教えてください。

石井：日本企業の実際の姿というものをみなさんに良く知ってもらいたいということです。そしてそれと経営学で使われている抽象的な言葉とを何とかリンクさせたいということです。また出席カードを毎回配ってますけれども、この意図は授業を一回限りで終わりにしないで、そこで起こったみなさんの疑問を出席カードに記入してもらい、翌週の授業の冒頭でなるべく答えたいと思っています。二回の授業でみなさんに内容を理解していただきたいと思っています。

司会：前回の授業ではみなさんは、どんな疑問をもたれましたか。



学生A：多角化企業の資源配分において積み上げ方式の問題点という話がありましたけれども、そのメリットというのはあるのでしょうか。

石井：積み上げ方式は基本的には望ましくないものということで説明したのですが、強いてあげれば、平等に出来る、各セクションが同じように増やしたり減らしたりできるということでしょうね。一般には民間企業以外の官庁とか大学などの公的な機関では積み上げ方式が多いですね。

学生B：製品ポートフォリオマネジメント (PPM) の話がありましたが、実際にPPMを使っている企業はどのくらいあるのでしょうか。

石井：PPMは70年代にアメリカのコンサルティング会社が開発して、70年代後半くらいから日本企業も使いはじめていますが、80年代にはかなり普及していきました。しかし、実際のところPPMを使っている企業は多いかといえばそうではないでしょうね。むしろまだ積み上げ方式とか自己完結方式のほうが多いかもしれません。それに授業でも述べたようにPPMには問題点も数多いですから、活用



している企業でも必ずしもうまく使っているとも思えません。使うことを躊躇している企業も多いと思います。

学生C：国際化戦略のところの質問です。異なる市場環境に参入する際に、カネ、モノ、人の順で参入しやすいとおっしゃられていましたけれども、そういう順番でないで参入するのは難しいのでしょうか？

石井：先週、直接投資の話をしましたよね。その場合には人も出ていかなければならないんですが、そこから始めるということもありますよ。あれはあくまでも参入のしやすさということであって、やはり企業はやりやすい方から出ていくと思います。ただいろいろな問題、例えば貿易摩擦の問題とかが出てくると、もうモノだけで輸出するのでは済まなくなって、それで人も出ていかざるを得ないということになりますね。

(6月12日、石井ゼミ(2部)の授業中に取材をさせていただきました)

産業総論

小坂 直人

司会：講義を受けて、関心を持った点を教えてください。

学生D：プリント配布された「ドイツの原発」の報道に興味をもちました。

小坂：毎回ではないけれど、ニュース性のある話題を紹介しています。今日は、ドイツの原発廃止についてです。

司会：知っていましたか？

学生E：きのうテレビでみました。



学生F：知りませんでした。

小坂：緑の党を含むドイツ連立政権下でこの政策が結実しました。原発は私たちにとっても重大な問題を提起しており、2学期に採りあげることになると思います。

学生G：今日の講義は、鉄とかスチールとかの話で、過去に溯った事例について解説がありましたが、これは何だったんだ、という感じです。



小坂：知識がどう繋がるか、ということだけど、古い過去の産業革命をなぜやるのか。考えてみると、鉄は産業の米、と言われていたけれど、現在でも日本の資本主義の基盤を築いており、もとを正せば、やはり産業革命の考察抜きでは今の産業についても解らない。あと、試験とも関係しますが、鉄についての細かい知識を覚えるのを期待しているんじゃないかと、この話を聞きどう自分で受け取るか、そして自分なりの考えを形成することを期待しているんです。知識は考えるためのヒントです。

学生E：今日の講義は、西洋経済史と内容がかぶっていて、紡績から入ったような産業革命は本当にあったのか、というのを聞き、そして、この産業総論では、鉄とか機械をつくるための機械、という今までないところから話され、違った面をみた、という気がしました。

小坂：産業革命の捉え方には論争があるけれど、蒸気機関とか工作機械、鉄など、技術をより幅広い視野から考えることが必要です。経済学はいろんな講義で内容が重なり、複数の科目でカバーできたり、関心を拡げたり、また、先

生方が指摘する問題点も各々異なっている、というのが面白いところです。どれが正しい、と早急に求めず、消化しながら自分の考えをつくるのが大事です。

学生F：産業革命自体、何？という感じで、小学生の頃から、ただすごい、という印象をもっていました。ですから、講義を聞き、改めてその革命としての意義が解ってきました。

学生G：ゼミの先生から、大学はこれまでの受験勉強と違い、知識をひろげることが大事だと言われ、そんなものかな、と思っています。

小坂：知識を得る意味は、ただ知識の集めで終わるのではなく、それをもとに筋道立てて考え、論理立てができ、どう整理するか、が大事です。講義で、先生方が教えることを、そのまま受け入れなくてもいいわけで、教員側も独自の論理立てで説明している。それを基に自分なりの考えを築くことが、大学での学習の面白さだと思います。

(6月16日、産業総論(1部)の授業中に取材をさせていただきました)

心理学

鈴木 修司

司会：この講義を受けていて興味を持ったテーマについて、教えてください。

学生H：裁判の目撃証言についての話がおもしろかったです。

鈴木：それは、人の記憶について考察する章での事例です。ある日突然ある場所にて、事件を目撃する。で、そのことを人間はどこまで記憶できるんだろう、ということ、記憶の話をするさわりのところで解説したのです。こういう話をすると、学生が抱いている心理学とは違うように感じる人が多いようです。

学生I：そうですね。心理学は、人の心理そのものを扱うと思っていただけ、違っていました。

鈴木：心理学というのは、人間が行動にでるまでのいろいろ内部の原因について考える。行動に出る前に、見て、

考えているわけだし、考えるときも、その場だけじゃなく、あの時こうだったとか過去の記憶も引き出す。だから、この過程について考察するのが、心理学の大事なテーマのひとつなんです。

学生H：でも、聞いていて、楽しいです。

鈴木：1学期は、心理学の基礎とか、概念など地味な話しかしてないけれど、2学期には、行動とか、動機づけとか、情動とか、あと発達など、わかりやすくなるのでは。ただ、そのためには基礎的な理解が必要なんです。

学生I：だから、結構繰り返しも多いんですね。

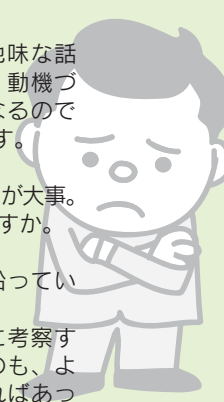
鈴木：そう。一回でわかることはないで、繰り返しが必要なんです。

司会：ノートは、どういうふうにとっているのですか？

学生H：私は、言ったことは全部とってます。

学生I：こっちは、要約。でも内容は、教科書に沿っていますね。この教科書の心理テストも面白いし。

鈴木：心理学といえば、人間のシステムと行動に考察すること。その心理テストのように物を見るというの、よく考えると不思議なことで、こっちの形にも見えればあつ



ちの形にも見えるなど、どっちでもいいものを、どっちかでみる。その背後には、実際に三次元のもので触れてみればわかることが、見る時は、どちらかに見える。その空間をなぜそう見るかの、そこにはルールがあり、その見え方を研究する。これも心理学のテーマです。見え方によってその人の心理状態とか、トラウマとか、コンプレックスとか、ようするに潜在的に人間がどういう風に見たい、という見え方を検討することで、その人の性格が解る、という研究もあるんです。

司会：先生のこの講義でのねらい、理解させたい、ということは何ですか？

鈴木：心理学は、君たちが思っているのとは違うんだよ、ということかな。

学生H：それは、講義でもおっしゃってましたよね。

鈴木：そう。そして、1年間通して基礎を学ぶことで、応用分野へも関心が拡がっていき、理解が深まっていくと思います。



(6月13日、心理学(1部)の授業中に取材をさせていただきました)

私の履歴書



【石田 修一講師：商品学（製品開発論）】

経歴

1967年——北海道札幌市に生まれる
1990年——千葉大学工学部卒業
1992年——東京工業大学大学院理工学研究科修士課程修了
1992～1996年——ソニー株式会社勤務
1998年——北海道大学大学院経済学研究科修士課程修了
1998～2000年——日本学術振興会特別研究員
2000年——北海道大学大学院経済学研究科博士後期課程修了、北海学園大学経済学部講師

●主要著書

"研究開発における産学官の知識交流と知識有効性,"『オフィス・オートメーション:情報系』, Vol.19, No.1, (1998)

"研究開発における知識進化能力,"『日本経営システム学会誌』, Vol.16, No.2, (2000)

"知のテクネー,"『知識文化論 [I]: 知の神秘と科学, 第5章』, 新評論, (近刊)

●現在の研究テーマ

研究開発における組織と戦略

学生時代について
教えてください。
どんな学生時代でしたか？

大学時代はよく飲んでいました。合コンもずいぶんしましたし、いろいろとイベントも企画しました。大学卒業後は、理工系の大学院に進学したのですが、そこで出会った指導教官がトルコ人で、日本語をほとんど話すことのできない人でした。その先生はアメリカの大学で学位を取られていたので英語のできる方でしたから研究指導はすべて英語で行われました。日本に居ながら2年間留学したようなものですね。英語の論文もずいぶん読みました。英語の学術ジャーナルのコピーを2年間でダンボール5箱ぐらいは読んだと思います。ですからこの大学院生活で得たものといえば、研究内容そのものよりも英語だったかもしれません。

研究者の道に進むことを
決めたきっかけは
何ですか？

私は学生時代から会社勤務を含めて10年間、首都圏で生活しておりましたが、そうした生活に多少疲れていたこともあって、4年前に実家のある札幌に帰って参りました。そして札幌で何かビジネスを起こそうと思い、大学院で経営学を学ぶ事にしました。しかし指導教官が大変面白い研究をされていたこともあり、そのことに影響を受け研究者の道を志すことにしました。もともと好奇心が強いので、研究者として仕事をしていくことが自分に向いているということに、今まで気が付いていなかったような気がします。また修士課程修了前に日本学術振興会特別研究員の採用が決まり、博士後期課程に進むための金銭的な問題がクリアされたことも大きな要因です。

その他にこれまでの人生で
印象に残ったことは
ありますか？

ソニーに勤めていたときにリチウムイオンバッテリーの研究開発に携わり、世界をリードする職場で働くことができたことを大変誇りに思っております。どのような分野でも世界の最先端を目指して仕事をしていくということは、大変エキサイティングですし緊張感もあります。理工系の大学院で研究をしていたときも、世界を意識しながら成果を出していた面がありましたが、ソニーで体験したことはそれとはスケールが異なっておりました。研究開発の成果がそのまま世界のモバイル産業に影響を及ぼすものでしたし、職場の皆がIT産業の将来を握っているぐらいの心構えがありました。



▲ソニー時代の職場のメンバーと



【大沼 盛男教授：経済政策】

経歴

1931年——宮城県鳴子町に生まれる
1953年——旧制北海道大学農学部卒業
1959年——北海道大学大学院農学研究科修士課程修了
1962年——北海道立総合経済研究所研究員
1980年——北海道開発調整部専門調査員
1981年——北海学園大学経済学部教授

●主要著書

編者 『地域開発政策の課題』、1983年、大明道
共著 『講座 日本社会と農業 ①日本のフロンティアのゆくえ』、1985年、日本経済評論社
編著 『揺れ動く現代世界の経済政策』、1995年、日本経済評論社
編著 『ロシア極東の農業改革』、2000年、御茶の水書房

●現在の研究テーマ

経済体制転換期の経済政策・土地政策の国際的な比較研究

先生が北海道大学の農学部に入
学されたのは、
どうしてですか？

入学後の学生生活は
どのような
ものだったのですか？

大学院から研究者の道へは
どのようにして
進んだのですか？

最近は専門化が進みすぎて、
生きている人間の顔が
見えないですね

本学部について
感じることは何ですか？

私 は旧制弘前高等学校で、理科乙類（ドイツ語専攻）に所属し、大学へは農学系が医学系とい
うのが当時のパターンだったので、社会科学への関心から農業経済学科を選びました。また、
大沼公園を訪れたことから都府県とは異なった土地へのあこがれもありました。

1 950年当時の北大は、まさに北の端っこだ、まだ古い木造の建物が残っていました。ただ、
結核の患者が多く、学生も生活問題を抱えていたことから、これを自身の問題と考え、生活
協同組合の運動に取り組みました。占領政策の転換期で学生運動も高揚している中で当時の学生は非
常に困難な状況で生活をしていました。

当初、私にとって農学はとっつきにくく、はずかしながら講義にはほとんどでませんでした。ただ、
本はマルチ型で読み、印象に残った一つに『近代経済学の解明』（東京商業大学（現一橋大学）杉本栄一
著）があります。また、友人関係からも多くの知的刺激を受けました。故田中修前北海学園大学学長も
その中の一人で、日本資本主義論争や農業問題についてよく議論をしました。また、農業史ゼミで宮城
の大地主について報告した時、「こんな苛斂誅求な地主は北海道にはいない。それは一方的な見解では
ないか。」と指摘を受け、学問には多様な見解があるのだ、と大学を実感しました。

卒 業後3年間高校教師で過ごし、農業経済について勉強しなかった、と感じたことから大学
に戻ろう、と決意しました。現職のまま職場を夜間の定時制に移し、昼間大学院へ通ったの
です。ですから、私は、社会人大学院生第一号のようなものです。

その後、現場教員に戻った後、北海道庁の総合経済研究所の話がきました。1962年に赴任した当時
は高度成長初期で、農業基本法、農業近代化などが開始された時期でした。構造改善をどのように編
成変えるのか、地方レベルでも着手していく必要があったのです。『北海道農業発達史』（中央公論
社から発刊）という研究の中で、私は、一作物であるハッカを担当し、本学部の山田定市先生も同じ
スタッフの一員でした。

この研究のために地方に行き、こうやれば調査はできるんだ、と実感しましたが、家を留守にしがちで、
子供が私の顔を忘れるほどの「母子家庭」でした。ただ、私は一地域調査からでも国際的な中心部に攻
め込むことができる、と確信を持ちました。ハッカは国際的な投機対象の商品であり、北海道の中の一
地域の問題でも、作物の盛衰の中における地域と生産と風土の有り様、そしてこれが国際的な環境と結
びついていることがわかったのです。

い や、こんなこともあったんです。北見のハッカ調査に行った農家で手厚くもてなされ、「泊ま
っていい」というようなことがあった。ところが、最近、その農家と同じ名前の子が2部に
入学し私のゼミに来た。しかも、研究テーマで、「ハッカをやる」と言ったので、実家を確かめると、
調査に行った農家のお孫さんでした。こんなことがあるのも、教員の楽しみなのかもしれません。

大 学ではあまり農業経済の実態調査ができなくなり、経済政策の講義では、グローバルな視野から講
義をしているため、僕は今「離農」しています（笑）。そういう中で、強い関心もってきたのがロシア
の研究です。レーニンの辺境論では、極東の実証的な研究が抜けている。そこで、辺境論の相互比較史とし
てロシア極東をとりあげ、ロシアの開拓と北海道の開拓についての比較研究をしています。こうした研究が
できるのは、大学で交流の機会を与えられたからだと思います。

北海学園大学の経済学部生は、あまり経済学への確信になる部分がないまま出ていくことが多いと思
います。そういった学生への刺激と訓練のために、僕は農村や地域につれて行く。そこで飲んだ酒は、卒業後
生涯忘れない強烈な印象を与えます。こうした意味では、教育の場をもうすこし抜けて考える必要があるの
ではないでしょうか。単に現場主義ということだけでなく、学生にとって経済学が自分の生き方と遊離したもの
でなく、かつ、その学習のなかから息づいている人々を感じとり、顔が見える調査研究ができるのも経済学だ
よ、ということを経験させる。この意味で私の実態調査研究は、少しでも役に立ったかな、と思っています。

1学期講義の ポイント



●鈴木 修司助教授
「心理学」
指定した教科書と自己作成したノートを照らし合わせて学習してください。講義で修得すべき知識は教科書にあります。しかし、知識以上に重要なのは、講義で解説したような背景にある考え方や意味を理解することです。

「コミュニケーション論」
配付したプリントを基本として学習を進めてください。しかし、それだけでは不十分なので講義中に自分で作成したノートで補って下さい。与えられた知識を吸収するだけでなく、自分で知識をまとめるようにしてください。

●塩川 春彦教授
「英語講読(1年生科目)」
試験は辞書持込可ですが、テキストを細部までしっかり理解していないと高得点は望めません。特にキーワードはしっかり押さえておいてください。

「英語文化演習A(2年生科目)」
テキストを何度も音読すること。試験は、音読、リスニング、ディクテーション、重要語を使った英作文などが中心になります。

「英語文化演習B(3年生科目)」
試験は辞書持込可ですが、テキストを細部までしっかり理解していないと高得点は望めません。特にキーワードはしっかり押さえておいてください。

「演習Ⅰ」
テキストを何度も音読すること。試験は、音読、リスニング、ディクテーション、重要語の言い換えなどが中心になります。

●田中 昭憲助教授
「体育実技」
単位修得には、授業時数の3分の2以上の出席が必要です。体育実技の授業を受ける前日は夜更かしをせず、体調を十分に整えて出席してください。



●柘植 尚則助教授
「社会思想史」
1学期は西洋の社会思想を概観します。講義で紹介する思想家たちの中で特に関心をもった人物について、さらに自分で勉強されることをお勧めします。(この機会に図書館を積極的に利用してみてください。)

●細見 眞也教授
「国際事情」
講義の中で紹介したり言及した書籍(本)の中から選んだ本を読むこと。ただし、1回読んで難しいからといって止めないで、難しい部分をノートに取りながら4回、5回と繰り返し読んでほしい。

●水野 邦彦教授
「哲学」
授業中に内容は消化吸収できたことと思います。関心があったら、教科書欄外に示されている書物を図書館でさがしてみてください。試験対策は自分のノートと教科書を読み直して話を思い出しておけば十分でしょう。

●河西 勝教授
「経済学原理」
企業とは、循環資本つまり貨幣支出→生産の三要素購入→生産過程→商品販売→貨幣収入(この繰り返し)と利子のみ固定資本(工場設備所有)との二元論的存在である。流通(前者)による階級関係(後者)の再生産。

●笠嶋 修次教授
「現代経済理論」
テキストの指定個所の予習→授業参加→講義プリント、テキスト等で復習→練習問題の解答、のサイクルを繰り返すことで講義内容の理解、学期試験とも対策は十分です。

●木村 和範教授
「経済統計学」
1回の講義を聞いたら、できるだけ記憶が鮮明なうちに、その講義の主題を簡潔に(できれば10文字以内に)まとめることを薦めます。半年(あるいは1年)経ってから、それを通して見れば、その講義は全体として何を主眼としたか、また講義のポイントは何かが明確になります。

●川瀬 雄也教授
「財政学」
これまでの講義の展開で分かったかと思いますが、講義の基礎とも言える現代経済理論についての理解が不十分な場合、財政学も十分に理解が進みませんので、この辺をもう一度復習なり、関連文献で補っていただく必要があります。

●小坂 直人教授
「産業総論」
一講義一つないし二つのテーマで進めてきました。ノートで何がそのテーマであるかを確認し、テキスト、資料その他でテーマ内容を補充したノートを作成すること。講義の内容をどれだけ記憶しているかではなく、講義のテーマと私の問題提起に対して、みなさんが何を考え、どう答えようとしているのか、その姿勢と答えの首尾一貫性を問う形を主たる設問にしますので、試験対策もそれを念頭においてください。

●森下 宏美教授
「経済学史」
毎回配る講義のポイント・解説編を受講後読み直し、各経済学者の主張そのものを理解すること。また彼らの思想の意義や限界について、講義のポイント・考察編を参考に自ら考えてみる。原典、参考文献も読むこと。

●伊藤 淑子教授
「社会保障論」
1学期の社会保障論は、総論と歴史の部分を取っており、この部分を理解することが2学期の各論理解の前提になります。関心をもって耳を傾け、講義の要点を聴きとっていれば十分でしょう。

●奥田 仁教授
「北海道経済論」
前半のポイントは、①地域経済の考え方、②マクロ経済的に見た北海道の地域経済、③北海道経済の歴史の三つです。みなさんが学んでいる経済学を、北海道という地域に即して考えるように心がけてください。

●竹田 正直教授
「ロシア極東社会経済論」
第一は、サハリン州の社会、経済の理解で、テキストの三章までの学習です。第二は社会、経済と人間の発達、教育との関係の歴史的理論的学習で、先史時代の社会経済的過程の教育機能や古代の独自の教育過程の発生と発展です。

●西川 博史教授
「日本経済論」
講義でいつも述べているように、毎日の新聞の経済記事、とくにアジア関係のものに注目して、レポート等を提出するよう心がけること。

●二瓶 剛男教授
「国際関係論」
一学期は国際関係を理解するための基礎理論が中心です。とくに国民経済の構造と、貿易、資本輸出、国際通貨体制、国際政治などとの相互関係を、講義ノートおよび指定参考文献について、自ら考えることが必要です。

●大月 博司教授
「経営学」
レジュメ記載されていない講義のポイントやノートをまとめ、関連する部分のテキストを丹念に読むこと。もしそれで理解のできないところは、さらに参考文献を読んだり、経営学関連の辞典で調べて、理解を確実なものにすること。日常的には、興味ある分野について、新聞・雑誌等に掲載される経営学に関する記事を継続的に集めておくこと。最初分からなかったことが次第に分かるようになって、経営学の面白さが実感できるはずですよ。

●福永 厚教授
「情報処理論」
試験は用語、計算、記述の問題からなり、問題数がかかり多いので、事前に配布プリント、ノートをよく復習しておくこと。

●青野 正道教授
「銀行論」
百年に一度といわれる変化の時代に乗り遅れた個人や法人が北海道では目立つようになりました。置いていかれないように講義ではIT革命やネット金融などを取り上げています。

●石嶋 芳臣助教授
「企業形態論」
企業組織論形態における資本集中上の特徴と限界を理解すること。また、「株式会社」は徹底的に把握して頂きたいが、その際、株式会社制度の諸特質相互の関連性に注意しながら学習すること。講義中の余談にも注意。

●伊藤 友章助教授
「マーケティング」
配付したレジュメ、資料の内容をしっかりとおさえる。また学んだ知識を現実の身近な例に当てはめてみる習慣もつけましょう。また解答する際は、担当教員に対して自分の勉強成果を見せるのではなく、マーケティングについてほとんど何も知らない人に対して問題の内容を説明をするつもりで論述してみてください。

●犬塚 正智教授
「経営管理論」
講義のテキスト「戦略組織論の構想」をしっかり学習しておくことが大事です。板書や講義中に念を押したところなどをしっかり押さえておくこと。現代企業の成り立ちや情報化に対する企業の取り組み方などを纏めておくこと。

「経営情報論」
テキスト「経営情報論ガイダンス」の前半部分には各自目を通しておくことが大事です。授業中に話した我が国産業の情報戦略や発展過程についても理解をしておくようにしてください。また、日頃から新聞の経済欄や専門誌を活用する習慣をつけておいてください。

●今村 聡助教授
「会計学」
教科書を暗記するのではなく理解したうえで、用語や計算方法は正確に憶えて使えるようにすること。用語の間違い、誤字、平仮名ばかりの文章等は、その程度に応じて減点する。

●石井 耕教授
「企業行動論」
出席および試験により評価する。試験は、「持ち込み一切不可。試験問題の事前予告なし。記述式」の条件で実施するので、授業内容全般に理解を深めておいてもらいたい。わからないことは、出席調査カードで質問してもらいたい。



●牛丸 元教授
「国際経営論」
教科書を読んでもわからないことが多いと思うので、できる限り授業に出席してください。授業終了後、5分程度質問の機会を用意しますので、わからないところがあったら、どんどん質問しに来てください。テスト直前になってからの質問は慣むように。また銀行などに行くと、その調査部や研究所が発行している調査レポート(無料)などがあります。そのなかで、国際経営に関する記事を読むようにすると、学んだことが定着します。

●岡田 行正助教授
「経営労務論」
「それって本当なのだろうか?」「その背後には一体何があるのだろうか?」、と常に疑問を持ち、そういう視点からは非事象を考えてみてください。そうすることで、自分なりの見方、考え方が確立してくるはずですよ。

●高木 裕之教授
「財務諸表論」
1学期は今年から導入された連結会計の基礎となる個別会計を理解することに焦点を当てています。企業会計と企業経営との関連を示唆する記事が新聞等に出ているので、よく読んでください。

●福永 厚教授
「経営工学」
前期授業の最後に筆記試験を行う。教科書(経営情報入門)の第1章~第4章までの間で、例題や練習問題から数字を変えて出す予定。電卓必修。

●山田 誠治教授
「中小企業論」
中小企業の特質や経営分析等基礎的な説明をしたので、基本概念を頭で整理し、関心のある対象をそれに応用してみると理解が深まります。『中小企業白書』に目を通したり、興味ある企業・業種を比較してみる、等です。

